

習慣

安全運転を、習慣づける

(新潟) M運輸株 R. H

弊社では、毎年1月に、全従業員の運転記録証明書を申請し、該当者にはSDカードが配布される。もちろん、そこには事務員である私も含まれている。私がもらったSDカードの色はシルバー。4年以上10年未満、無事故無違反であることを証明するものだ。このSDカードの無事故年数を一覧にして掲示板に貼りだしているのだが、ドライバーの中には19年という記録を持つ人もいる。そんな人の無事故の秘訣とは一体なんだろう。私にもそんなものがあるだろうか考えた。

18歳で運転免許証を取って今年で8年になるが、未だ違反切符を切られたことはなくゴールド免許を保っている。通勤が主だし、そもそも運転歴が浅いから当然と言えば当然かもしれない。常に運転していると言っても過言ではないトラックドライバーと比べること自体が間違いだ。それでも、運転に対する考えや交通安全への心構えというものは、この会社に勤めた8年で嫌というほど身についた。

と言っても、私が無事故の秘訣などと偉そうに語れることはこれと言ってない。何か特別なことを実践しているわけでもなく、安全運転を心がけているかどうかと問われれば、まあそうなのだろうというレベルだ。こんな曖昧なことしか言えないのには理由がある。

「かもしれない運転」、「防衛運転」など、安全に運転するための文句は様々あるが、常に意識を張り巡らせたガチガチの緊張状態で運転をするというのも実際どうなのだろうと私は思う。

運送業界に身を置いていれば、耳にタコができるほど安全という言葉が付きまとう。当然だ。大前提だ。しかし、それゆえ安全、安全と意識しすぎて逆に疲れることはないだろうか。意識することは言うまでもなく大事だが、一点に集中するあまり事故を引き起こしてしまった事例も実際にいくつか見ている。本人は細心の注意を払っていたかもしれない。常に安全への配慮を忘れなかったかもしれない。それでも、運転するのは人間だ。“絶対”はありえない。

気を抜くなんてのは以ての外だが、常にピンと張り詰めた状態が最良とは、一概には言えないと思ってしまうのだ。適度な緊張感とリラックスのバランス、心にゆとりを持った状態で運転できることが理想の安全運転なのではないだろうか。スポーツに例えるとしよう。極度の緊張下では充分に実力を発揮できないことと同じだ。

プロのドライバーたるもの、安全運転は「意識してやるもの」ではなく「習慣」であるべきだと思う。つまり、意識のしすぎは安全運転が当たり前の習慣として身に付いていない証拠かもしれないのだ。無意識と言えはおかしいが、例えるなら呼吸のようなものだろう。息をするためにいちいち意識したことがあるだろうか。そんな人はいないはずだ。ならば安全運転だって、突き詰めていけばそこに到達することができるだろう。息をするのと同じように、無理に意識などしなくても安全運転が身に付くのではないだろうか。2週間か、1ヶ月か、3年か。どれだけ時間がかかるかはわからないし、もちろん簡単なことではない。それでもひたすら続けていくうちに、いつか意識は習慣へと変わる。無責任なことを言っているようだが、結局は気の持ちようだと思う。

話を戻そう。先ほど無事故の秘訣は特にないと言ったが、つまりはそういうことだ。いちいち意識をしなくてもいいところまで達したこと、それが私の無事故の秘訣なのだろう。そしてそれは8年という数字に現れている。願わくばこの先も会社で、記録を伸ばし続けていきたいし、もしもこの業界から離れてしまったとしても、10年でも20年でも無事故無違反でいたいと思う。